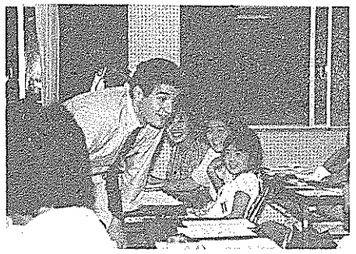
親子で楽しく『ハロー』

大篠小で英語教室

親子で楽しく英語を学ぼう――と六月二十日から大篠小学校で親子英語教室「ハローおおしのくん」が始まりました。

これは、遊びのなかで自然に英語に対する抵抗をなくすとともに国際語である英語を学ぶことによって国際感覚を身に着けてもらおうと大篠小学校のＰＴＡの皆さんが計画したもので、六回にわたって毎週月曜日に開かれます。講師は県教育委員会の中央教育事務所に英語指導助手として配属されているアメリカ人のジェイ・アラン・オルターさんとトーマス・モア・ダイハウスさんで、前半と後半それぞれ三回ずつ受け持つことになっています。語学学習に最も適していると思われる四年生のなかから二十六組が参加、参加者は始まる前から好奇心でわくわくしている様子でした。


英語っておもしろいね

教室に入ったジェイ先生が、いきなり「Ｈｅｌｌｏ．Ｉ　ａｍ…」と英語で自己紹介を始めたため、子供たちは面食らっていましたが、「これは英語教室です。皆さんなるべく英語でがんばってください」という先生の言葉に笑い声が起こり、緊張した教室の雰囲気が一気にほぐれました。気さくなジェイ先生の人柄と身振り手振りや歌、ゲームを交えたユーモアたっぷりの授業に会場からも冗談が飛び出すなど、子供たちには少し長いのではないかと思われた九十分もあっという間。

この英語教室では、簡単な会話や発音などを勉強していくことになっており、市教育委員会の担当者は「今の時期に外国人に接することや英語を学ぶことは子供たちにとって必ず大きなプラスになるはずです。今後も希望があればこのような事業をやっていきたい」と話していました。

高齢者学級が開講

600人余りが参加

楽しく学んで長生きしようと市内の四高齢者学級が六月に開講しました。

これは、ともすれば生活の範囲が狭くなりがちな高齢者の社会参加の機会を作り、見識を広めてもらうとともに、健康増進や長寿にもつながるようにと毎年行っているものです。今年は中央高齢者学級に三百人、三和百六十人、北部百七十人、前浜九十人が参加。毎年楽しみにしている人が多く、なかには始まった当時から十年以上も続けて参加している人も。講演会や移動教室、室内運動会など三月まで十回にわたって開かれることになっています。

北部高齢者学級の開講式

地域ぐるみで体力づくり

十市歩こう会

楽しく歩いて健康づくり――六月十九日に十市の石土池の周りを歩く十市歩こう会が開かれました。

これは、健康づくり事業の一環として「歩く」という最も簡単な全身運動によって体力づくりをしようと十市地区健康づくり推進会（細川春一会長）の呼び掛けで始まったものです。

この日は十市小学校の参観日と重なったため参加者は十三人でしたが、朝九時に十市小学校に集合した皆さんは、初夏の風の中、さわやかな汗を流していました。

推進会では今後も二ヵ月に一回、偶数月の第一日曜日に実施し、もっとたくさんの人に参加してもらって地域ぐるみで体力づくりを図っていく予定です。

石土池に向かって出発

ペチュニアなど五百五十本を育てる

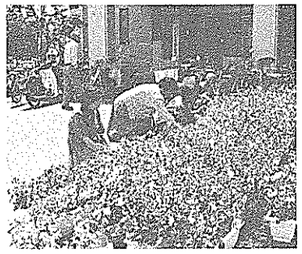
○花いっぱい運動○

花いっぱいの心和む環境に――と北部高齢者学級（野口賢学級長、百七十人）が、ペチュニアなど約五百五十本を育てています。

これは、北部高齢者学級の事業として南国農業改良普及所の飯尾京子改良普及員の指導を受けて始めたもので、三月に種をまき、五月に花の咲いたプランターを植田、久礼田、領石の花壇で市民の目を楽しませたあと、六月の中ごろそれを久礼田体育館に集めました。

今もゲートボールのかたわら水やりをするなどの学級生の熱心な世話で可憐な花を風にゆらせています。

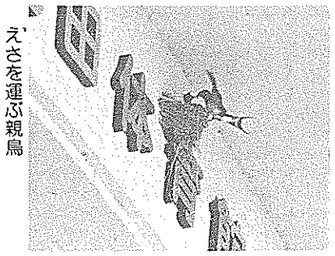
野口会長は「小さい花を育てるのはなかなか難しかったが、花作りが好きな人たちもいてこんなにきれいに咲かせることができました。今後はこれをどうやって定着させていくかが課題です」と話していました。


花の手入れをする学級生

つばめの子育てにも字はかんじん

久礼田体育館入口の「育」の字の上で、つばめが子育ての真っ最中。

五月の初めに飛んできて、果作りの場所として選んだのがくしくも「育」の字。地元の人たちが暖かく見守るなか順調にひなも返り、巣の中で「ピーピー」と元気に鳴き声を上げるひなに親鳥が懸命にえさを運んでいます。巣立つのももうすぐ、どんな若鳥に成長するのでしょう。


えさを運ぶ親鳥

第38回社会を明るくする運動

◪日時　七月十五日㈮　午前九時から

◪場所　市役所一階ロビー及び四階大会議室

◪内容

○覚せい剤、交通事故パネル展＝一階ロビー（九時～十二時）

○高知刑務所作業製品の展示即売会＝一階ロビー（九時～一時）

○青少年、婦人問題相談所＝四階大会議室（九時～十二時、相談電話㈹2111内線444）

○シンナー、覚せい剤防止ビデオ上映＝一階ロビー（九時～十二時）

○社明菓子、パネル販売

○公開ケース研究＝四階大会議室（二時～四時）

【社会を明るくする運動南国市実施委員会】

あゆみ　おちち

家庭教育専任講師　田植　静代

豚の出産の本を読みました。

親豚がいつごろ出産するかは親豚の乳房の張り方と色によって分かるそうです。

乳房がだんだん赤味を増し、そしてそれが紫色がかると、いよいよ生まれてきます。産まれてくる子豚の数は、紫色に張り切った乳房の数と同じだそうで、十六の乳房ならば子は十六匹必ず産まれ、多くなったり少なくなったりすることはないそうです。

最初の子豚を産み始めてから最後のを産み終わるまで六時間から十二時間ほどかかるそうですが、次々に産まれる子豚は全部が産み終わるまで放りっぱなしで、最後の子豚が出産し終わると、初めて一匹ずつにおいをかいで子であることを確認し、乳を与えます。

子豚はわれがちによい場所（下肢に近いほうがよく出る）を求め順々に乳房に吸い付きますが、いくら早く吸い付いてもお乳は出ません。例えば十六匹産まれたとしたら、十六匹の子豚が全部十六の乳房に吸い付いたとき、初めてお乳を出すそうです。

そして二、三回乳を与えているうちに子豚は自分の乳首はどれか覚えて、それが専用となります。

どの子にも平等に乳を与え育てるために全部がくわえなければ初乳を出さないとは、なんと神秘な親豚の身体の構造でしょうか。

人間の赤ちゃんもお乳を飲むことから人生が始まります。

授乳時期のお母さんが仕事中ふと赤ちゃんのことが気になったり、ああもうすぐ授乳だなと思った瞬間、両乳房にじんと伝わるものがあり、乳首からぽたぽたとお乳がたれだします。

これも母親と赤ちゃんの神秘的なつながりの一つではないでしょうか。

お母さんの心

先生、ひみつやで、
おちちはお母さんの心。
赤ちゃんがのんで、
お母さんの心が
赤ちゃんにつたわる。
それから
おっぱいの心をいっぱいためて
心の大きい人間になっていく。
そやから
お母さんの心は、
ええ心でなかったらあかん。

（一年生北村いちお君の詩）